

急拡大する中国と ASEAN の貿易関係

石川 幸一 Koichi Ishikawa

亜細亜大学アジア研究所 教授

(財) 国際貿易投資研究所 客員研究員

中国と ASEAN 諸国の貿易は、先進国市場では補完関係ではなく競合関係にあり、中国製品が ASEAN 製品のシェアを奪っている。一方、中国と ASEAN の貿易は 21 世紀に入り、急激に拡大しており、中国からの輸出だけでなく、ASEAN から中国への輸出も大幅に拡大している。1999 年前後には、中国製品の集中豪雨的な ASEAN への輸出により中国脅威論が喧伝されたが、現在は中国を重要な成長市場と位置づけている。脅威ではなく、機会と見ていることが FTA 締結の ASEAN 側の誘因となっている。

ASEAN 各国は、経済規模、産業の発展段階、資源賦存状況など多様である。そのため、中国との貿易関係も国により様相が異なっている。そのため、本論では、貿易の量的な発展と構造変化を ASEAN 全体だけでなく、ASEAN の主要国をとりあげ分析している。さらに、主要産品にみる貿易の特徴をみるとともに課題について指摘する。

1. 進展する量的拡大と構造変化

(1) 2002 年以降に急拡大

中国と ASEAN の貿易は 1990 年以降順調に拡大しており、特に 2002 年以降急激な拡大を続けている(表

1)。2003 年の ASEAN 中国首脳会議で合意した往復貿易額 1000 億ドルという目標は、翌年の 2004 年に実現してしまい、2005 年は 1305 億ドル(中国側貿易統計)に達している。2005 年と 1990 年とを比較すると輸出は 14.8 倍、輸入は 25.4 倍となって

いる。この間、中国の貿易は順調に発展してきたが、ASEAN との貿易はそれを上回るテンポで拡大しており、中国の貿易に占める ASEAN のシェアは、1990 年の輸出 6.4%、輸入 5.7%から 2005 年には輸出 7.3%、輸入 11.4%と上昇した。ASEAN は

10 カ国を合計すると、2005 年の中国の第 4 位の輸出先、第 3 位の輸入先となっている。ASEAN の貿易に占める中国のシェアも、1990 年の輸出 1.8%、輸入 2.9%から 2005 年には輸出 10.1%、輸入 10.0%に高まっている(注 1)。

表 1 中国の対 ASEAN 貿易の発展

(単位：100 万ドル)

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
輸出	3,736	4,135	4,262	4,683	6,379	9,756	9,697	12,633
輸入	2,956	3,824	4,205	6,012	6,840	9,739	10,698	12,410
	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
輸出	11,050	12,274	17,341	18,376	23,568	30,925	42,902	55,459
輸入	12,568	14,927	22,181	23,215	31,197	47,327	62,978	75,017

(注) 中国側貿易統計のため中国の赤字となっているが、ASEAN 側の統計では ASEAN の赤字となっている。香港経由の対中輸出が香港向けと計上されているためである。

(出所) 中国海関統計。2005 年は World Trade Atlas (原データは中国海関統計)

中国と ASEAN の貿易は中国側の統計では中国側の赤字だが、ASEAN 側の統計では ASEAN 側が赤字となっている(注 2)。国別にみると、インドネシアとフィリピンは中国側統計では中国の赤字、自国統計では自国の黒字であり、新規加盟 4 カ国は同じく中国側の黒字、ASEAN 側の赤字であり齟齬はない。しかし、マレーシアとタイは中国の統計、ASEAN 側の統計とも赤字を計上している(表 2)。これは、香港経由の中国への輸

出が ASEAN 側の輸出統計では香港向けとなっているためである。

香港の貿易統計によると、マレーシアからの輸入のうち 363 億 8800 万香港ドル(46 億 6500 万ドル)が中国に再輸出され、タイは同じく 207 億 5900 万香港ドル(26 億 6100 万ドル)が中国に再輸出されている。ASEAN 側の統計による貿易収支額に加えると、マレーシアは 7 億 9100 万ドル、タイは 6 億 1800 万ドルの黒字となる。なお、シンガポールとフィリピンは、香港

経由の中国向け再輸出を加えると、シンガポールは黒字に転換し、フィリピンは黒字が拡大する。中国とASEAN5(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ)の貿易は、実態的にはASEAN側の黒字といえるだろう。ただし、中国とASEAN新規加盟国(ベトナム、ミャンマー、カンボジア、ラオス)との貿易は、中国側の圧倒的な黒字である。

表2 中国 ASEAN 間貿易の収支
(2005年)

(単位: 100万ドル)

	中国側 統計	ASEAN 側統計	香港経由の 対中再輸出
インドネシア	-81	819.5	n.a.
マレーシア	-9,489	-3,874	4,665
フィリピン	-8,181	1,186	2,085
シンガポール	186	-76.4	2,534
タイ	-6,175	-2,043	2,661

(注) 香港の貿易統計ではインドネシア原産の中国への再輸出は公表されていない。

(出所) World Trade Atlas および香港貿易統計により作成。

(2) 高度化する貿易構造

中国とASEANの貿易は、量的な拡大と並行して商品構成の変化が進んでいる。1990年の輸出は、動植物、原材料、鉱物性燃料など一次産品が46%を占めている(表3)。製造業で

はゴム製品や木製品など資源加工品が中心の原料別製品が25.8%を占めており、機械は11.8%に過ぎない。しかし、一次産品のシェアは、2000年には18.5%、2005年には14.3%に低下している。製造業では、原料別製品のシェアは2005年には18.9%となる一方で機械が48.1%と輸出総額のほぼ半分に達している。

輸入では、一次産品が1990年の41.7%から2005年には19.7%にシェアを低下させ、資源加工品の油脂も15.4%から2.7%に大幅にシェアを低下させた(表4)。製造業では、原料別製品のシェアが20.3%から4.8%に低下し、機械が4.8%から60.6%に急激にシェアを拡大させた。機械の中心となっているのは電気機械(2005年のシェアは輸出25.4%、輸入43.5%)と一般機械(同じく輸出18.7%、輸入16.7%)である。電気機械では半導体、一般機械ではコンピューターとその部品が主要品目である。

このように、中国とASEANの貿易は輸出入とも一次産品から製造業に商品構成が変化し、製造業の中では資源加工型を中心とする原料別製品から機械に主要品目に変化してお

り、貿易構造の高度化が急速に進展していることを示している。ただし、こうした変化は ASEAN5(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ)との間で起きており、ASEAN 新規加盟国(ベトナム、ミャンマー、ラオス、カンボジア)と中国の貿易は全く異なっている。

表3 中国の対 ASEAN 輸出商品構成
(%)

	1990	2000	2005
動植物・食料品	12.1	7.0	3.8
飲料・タバコ	1.6	0.7	0.3
原材料	8.4	3.0	2.2
鉱物性燃料	23.9	7.8	8.0
油脂	0.2	0.0	0.0
化学品	7.1	9.0	8.0
原料別製品	25.8	16.5	18.9
機械	11.8	45.8	48.1
雑製品	4.2	10.1	10.5
特殊品	4.9	0.1	0.2
合計	100.0	100.0	100.0

(注) 1990年はASEAN5でSITC分類、2000年と2005年はASEAN10でHS分類である。HS分類をSITC分類と比較できるように以下のように分類しなおしたが、原材料と原料別製品は完全には符合していない。動植物・食品は、HS1類から24類でHS15(油脂)、HS22(飲料)、HS24(タバコ)を除く。鉱物性燃料はHS27類、原料及び原料別製品はHS25類、26類、40類から59類、63類から83類、化学品はHS28類から39類、機械はHS84類から89類、雑品はHS60類からHS67類、HS90類から96類。
(出所) 日本貿易振興会、中国対外貿易統計(1990年)。原資料は中国海関統計1990年である。

表4 中国の対 ASEAN 輸入商品構成
(%)

	1990	2000	2005
食料品・動物	3.6	2.8	2.1
飲料・タバコ	0.3	0.0	0.0
原材料	15.9	16.5	7.6
鉱物性燃料	21.9	15.9	10.0
油脂	15.4	2.8	2.7
化学品	8.2	12.9	10.8
原料別製品	20.3	6.3	4.0
機械	4.8	40.8	60.6
雑製品	1.3	1.7	2.1
特殊品	8.3	0.3	0.1
合計	100.0	100.0	100.0

(出所) 表3と同じ

2. 国により大きく異なる貿易構造

中国と ASEAN の貿易は、全体では大幅に拡大するとともに一次産品から機械を中心とした構造に変化している。しかし、ASEAN 加盟国は、経済規模、一人当たり所得、産業の発展段階、資源賦存、外資受け入れ状況など格差が大きく、極めて多様である。そのため、中国と ASEAN の貿易は国により規模、収支、商品構成が異なっており、2 国間でみていく必要がある。ここでは、紙幅の都合から、ASEAN5 と新規加盟国に分け、代表的な国をとりあげている。

(1) ASEAN5との貿易

ASEAN5 との貿易は、製造業品、特に電気機械と一般機械の比重が大きい。電気機械の中では、集積回路が大きなシェアを占めている。しかし、国による貿易構造の違いも大きい。特徴をまとめると、資源供給国として重要なインドネシア、電気機械のシェアが極端に高いが資源供給国でもあるマレーシアとフィリピン、商品の多角化がバランスよく進んでいるタイ、機械中心だが石油が主要品目となっているシンガポールといえよう。ブルネイとの貿易は、鉱物性燃料が輸入のほぼ 100%、往復貿易額の 8 割を占めている。ここでは、電気機械の比重が増しているマレーシアと資源の対中輸出が重要なインドネシアをとりあげる。

①マレーシア —電気機械が中心だが資源も輸入では重要

1990 年の貿易は、輸出は繊維製品が最大であるが、飼料、石炭・コークス、穀物・調製品などの一次産品が上位品目となっており、輸入は植物性油脂(パーム油)、生ゴム、コルク・木材、石油・石油製品の 4 品目

で 68.7%を占めている。このように 1990 年は一次産品が大半を占めていたが、その後の 10 年間で電気機械と一般機械が過半を占める構造に一変している。

2005 年の輸出は、一般機械が 27.5%、電気機械が 24.9%とこの 2 品目で 5 割を超えており、光学機器(液晶デバイスが 83%)、鉄鋼、衣類・付属品、輸送機械などが上位品目となっている(表 5)。一般機械は、自動データ処理機械(コンピューター)とその部品で 80%を占めている。電気機械は、集積回路、送信機器(携帯電話など)、テレビ部品、カセットデッキ部品などが主な品目である。

輸入は、電気機械のみで 63%を占めている(表 6)。2000 年にも電気機械は最大の輸入品だったがシェアは 38.3%であり、5 年間で大幅にシェアを拡大している。この大半は集積回路であり、一種のモノカルチャーとってよい状態になっている。しかし、資源および資源加工品もシェアは小さいものの、依然として重要な輸入品目であり、輸入額も拡大している。たとえば、油脂(パーム油)は第 3 位(シェア 6.3%)、ゴム・同製品

は 5 位 (3.4%)、木材・木製品は 6 位 (3.4%)、鉱物性燃料は 8 位 (2.4%) である。ただし、木材・木製品の輸入額は停滞しており、シェアは 2000 年の 11.6% からほぼ半減している。

伸び率の大きな品目は、輸出では光学機器、一般機械、鉱物性燃料、

人造繊維 (長繊維)、鉄鋼などである。この 1-2 年で大幅に増加したのは、鉄鋼、光学機器、野菜である。野菜は、アーリーハーベットの影響と考えられる。輸入では、電気機械、ゴム・同製品、有機化学、鉱物性燃料、せっけんなど、無機化学である。

表 5 中国の対マレーシア輸出主要製品の推移

(単位: 100 万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
一般機械	221.8	553.3	1,323.3	1,894.5	2,274.2	2,924.5	27.5%	<i>13.18</i>
電気機械	926.8	1,243.7	1,631.8	1,587.5	2,175.8	2,641.9	24.9%	2.85
光学機器	41.5	105.9	90.9	159.1	294.6	875.3	8.2%	<i>21.09</i>
鉄鋼	60.1	44.2	70.4	81.0	305.6	384.7	3.6%	<i>6.40</i>
鉱物性燃料	20.7	35.6	101.6	51.0	165.7	259.5	2.4%	<i>12.54</i>
衣類・付属品 (HS61)	51.0	47.8	64.1	126.6	187.7	237.0	2.2%	<i>4.65</i>
輸送機械	30.4	44.4	63.6	122.4	152.3	209.2	2.0%	<i>6.88</i>
鉄鋼製品	47.5	59.9	72.2	100.5	142.6	200.4	1.9%	<i>4.22</i>
プラスチック	29.7	35.5	56.5	77.6	111.4	167.7	1.6%	<i>5.65</i>
野菜	16.7	30.3	47.6	81.1	105.8	153.4	1.4%	<i>9.19</i>
衣類・付属品 (HS62)	58.3	50.8	73.1	99.9	110.9	146.3	1.4%	2.51
合計	2,564.7	3,223.4	4,975.4	6,142.2	8,085.5	10,617.7	100.0%	4.14

(注) HS61 は衣類 (メリヤス編物またはクロセ網物に限る)、HS62 は衣類 (メリヤス編物またはクロセ編物を除く)。斜体は総額の伸び率より高い伸びを示した品目 (以下同じ)。

(出所) World Trade Atlas により作成 (以下、表 15 まで同じ)

表6 中国の対マレーシア輸入主要製品の推移

(単位: 100万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
電気機械	2,097.1	2,738.7	4,567.4	7,184.9	9,986.0	12,665.0	63.0%	6.04
一般機械	787.4	930.6	1,110.1	1,712.1	1,850.6	1,727.5	8.6%	2.19
油脂	396.4	376.3	681.2	1,113.9	1,383.2	1,270.9	6.3%	3.21
プラスチック	294.4	340.8	437.9	615.1	761.5	868.1	4.3%	2.95
ゴム・同製品	104.5	101.3	166.0	306.1	504.1	684.3	3.4%	6.55
木材・木製品	637.4	396.2	488.3	640.9	667.2	521.7	2.6%	0.82
有機化学	110.0	185.8	330.3	384.4	538.3	478.6	2.4%	4.35
鉱物性燃料	360.7	444.7	679.3	953.8	1,161.9	473.0	2.4%	1.31
光学機器	67.2	75.0	71.1	147.6	245.3	251.5	1.3%	3.74
各種化学品	118.5	98.2	137.3	161.2	184.1	200.7	1.0%	1.69
鉄鋼	54.0	42.5	80.7	173.7	148.1	169.5	0.8%	3.13
合計	5,480.0	6,205.5	9,295.5	13,998.3	18,162.2	20,107.8	100.0%	3.67

②インドネシア —資源中心の輸入構造は不変

ASEAN5の中で資源供給国として最も重要なのはインドネシアである。たとえば、1990年は、コルク製品・木製品が輸入の46.2%を占め、石油・石油製品が22.7%となっている。2005年の輸入では、合板を中心とするコルク・木製品のシェアは下がったが、鉱物性燃料が最大で、一次産品が大きなシェアを占める構造は変わっていない(表8)。ただし、機械類は着実に増加しており、一般機械が2位、電気機械が4位となっている。一般機械では、自動データ処理機械(コンピューター)が75%を締めている。2005年の輸入に占める電

気機械のシェアは7.9%とマレーシアやフィリピンと比べると非常に低い。また、電気機械の中では、集積回路が最大だがシェアは25%とマレーシア、フィリピンに比べると低く、カセットデッキなどの部品、テレビ部品なども輸入されている。一次産品の比重は依然として大きく、木材、ゴム、鉱石、銅、錫などが上位20品目に含まれている。資源加工品である油脂も依然として重要な輸入品である。一次産品の中では、2000年に2位の輸入品だった木材・木製品と3位だった紙・紙製品の輸入額が減少している一方で、銅・銅製品、錫・錫製品が2004年から急増しており、中国の資源獲得政策の一環と考

えられる。

一方、輸出品は、1990年は採油用の種が最大だったが、2005年の最大の品目は鉱物性燃料(自動車用・航空機用ガソリン)である(表7)。これは、原油価格の上昇という要因もあるが、長期的にはインドネシアの油田の老朽化による原油生産量の減少と国内消費の増加により国内供給が不足しているためである。製造業品のシェアは1990年も高く、HS分類では一般機械に含まれる特定産業用機械、原動機・部品、金属加工機械が上位に来ている。2005年の輸出では、一般機械(コンピューター部品、ボイラ

一、ポンプ、エアコンなど)が2位、電気機械(携帯電話など送信機器、テレビ部品、カセットデッキ部品など)が3位となっている。

伸び率の高い品目は、輸出では鉱物性燃料、一般機械、鉄鋼、鉄鋼製品、光学機器、人造繊維(長繊維)、野菜などである。特に鉄鋼はこの2年間に6.9倍、光学機器は5.4倍の急増となっている。輸入では、一般機械、鉱石、ゴム・同製品、銅・銅製品、錫・錫製品など一般機械以外では資源の伸びが目立ち、特に錫・錫製品は2年間で24倍の増加となっている。

表7 中国の対インドネシア輸出主要品目の推移

(単位: 100万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
鉱物性燃料	286.3	345.6	287.5	636.0	842.7	1,583.8	19.0%	5.53
一般機械	405.2	386.2	496.0	641.7	943.4	1,236.6	14.8%	3.05
電気機械	516.6	524.1	544.7	633.1	949.6	1,140.3	13.7%	2.21
鉄鋼	107.0	49.9	55.2	81.0	422.0	561.7	6.7%	5.25
輸送機械	285.1	159.0	177.3	234.2	362.9	364.2	4.4%	1.28
鉄鋼製品	63.4	63.0	97.2	94.5	161.8	252.0	3.0%	3.97
綿・綿織物	119.5	74.6	117.4	163.6	162.3	240.1	2.9%	2.00
有機化学品	79.8	82.0	93.8	121.3	167.7	239.0	2.9%	2.99
無機化学品	98.8	121.2	133.6	130.3	159.9	214.2	2.6%	2.17
光学機器	22.7	22.5	27.7	36.5	54.1	196.0	2.3%	8.63
プラスチック	33.5	35.5	49.7	69.4	128.6	154.2	1.8%	4.60
合計	3,061.2	2,847.3	3,426.8	4,481.8	6,257.4	8,348.5	100.0%	2.73

(注) 輸送機械は鉄道用または軌道用を除く輸送機械。

表8 中国の対インドネシア輸入主要品目の推移

(単位：100万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
鉱物性燃料	1,067.2	653.5	815.2	1,164.6	1,304.8	1,997.6	23.7%	1.87
一般機械	210.6	247.4	468.8	645.4	819.7	945.3	11.2%	4.49
有機化学	269.5	365.3	453.8	645.3	834.0	781.4	9.3%	2.90
油脂	190.5	152.9	242.3	447.1	732.4	745.2	8.8%	3.91
電気機械	228.9	302.5	286.9	346.6	603.3	668.1	7.9%	2.92
木材パルプ	541.5	415.1	451.0	506.7	600.3	659.0	7.8%	1.22
木材・木製品	720.0	701.1	545.6	518.9	518.1	428.4	5.1%	0.60
ゴム・ゴム製品	51.0	99.4	63.7	153.2	296.1	402.2	4.8%	7.89
鉱石	30.8	18.2	66.2	94.9	107.0	257.8	3.1%	8.37
紙・紙製品	387.3	247.3	336.2	297.4	291.6	233.5	2.8%	0.60
銅・銅製品	13.2	20.9	34.7	76.9	106.3	183.7	2.2%	13.91
合計	4,402.0	3,888.2	4,500.9	5,754.3	7,212.1	8,429.9	100.0%	1.92

(2) 新規加盟国との貿易

ASEAN 新規加盟国(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム)と中国の貿易構造は、中国とASEAN5との貿易とは全く違っている。ASEAN5と中国は、輸出入とも機械類が中心となった水平貿易であるが、新規加盟国と中国の貿易は、新規加盟国が資源を輸出し工業製品を輸入する垂直貿易となっている。また、ASEAN5との貿易は、中国の赤字あるいはほぼ均衡(シンガポール)となっているのに対し、新規加盟国との貿易は中国の大幅黒字となっている。資源以外に中国が輸入できる製造業品が少ないためである(表9)。

表9 中国のASEAN各国との貿易および収支(2005年)

(単位：100万ドル)

	輸出	輸入	収支
ASEAN6計	48,244	72,139	-23,895
ベトナム	5,639	2,549	3,090
ミャンマー	935	274	661
カンボジア	536	105	431
ラオス	105	26	79
新規加盟国計	7,215	2,954	4,261
ASEAN10計	55,459	75,093	-19,634

(注) 中国側貿易統計による。

中国は、新規加盟国への経済協力に力を入れているが、その目的の一つに資源の確保がある。中国は、新規加盟国では投資により資源を開発し、そのために資金協力で道路などインフラを建設し、鉱産品や農産品

を輸入している。このような貿易・投資・経済協力が三位一体となった戦略は、ラオスやミャンマーなど新規加盟国で展開されている(注3)。

①ベトナム—資源輸入が大半だが電気機械の輸入が始まる

ベトナムとの貿易では、鉱物性燃料が輸入の 65.2%、輸出の 16.4%を占めている。原油を輸入し中国で精製してガソリンなど石油製品として輸出しているためである(表 10、11)。石炭の輸入も多い。輸出は、ほかに鉄鋼、一般機械、電気機械、肥料、綿・綿織物、輸送機械、人造繊維など上位はすべて製造業品である。輸入は、鉱物性燃料以外にもゴム・同製品、鉱石、木材・木製品など一次産品が中心だが、電気機械が 4 位、一般機械が 7 位、履物が 9 位に登場している。金額とシェアは小さいものの、電動機・発電機、印刷回路、トランスを主力とする電気機械の輸入は 2000 年からの 5 年間で 12 倍に増加しており、ラオス、ミャンマーとは異なり、外国投資導入による輸

出工業化が始まっていることを示している。ベトナムは、新規加盟 4 カ国の中では、外国投資受入額が格段に大きく、外国投資家の評価も市場の大きさ、優秀な人材の存在、政治・治安の安定など高い。また、ASEAN だけでなく中国への供給拠点としても注目されており、インフラや工業団地などインフラも急速に整備が進んでいる。ベトナムは、新規加盟国グループから抜け出し、インドネシアやフィリピンにキャッチアップする可能性も大きい(注4)。

伸び率の大きな品目は、輸出は電気機械、メリヤス編物又はクロセ編物、綿・綿織物、人造繊維、アルミニウム、原皮などである。輸入では、電気機械、履物、鉱石、食用野菜、食用果実、穀粉など、家具・寝具、その他の植物性紡績用繊維などである。中国が強い競争力を持っている履物の輸入が増加していることは、中国の経済発展に伴う労働コスト増加によりこうした労働集約型製品の輸入が拡大する可能性を示しており注目される。

表 10 中国の対ベトナム輸出主要品目の推移

(単位：100万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
鉱物性燃料	208.5	245.6	399.3	720.1	641.6	926.2	16.4%	4.44
鉄 鋼	103.2	118.5	89.3	103.7	460.4	758.7	13.5%	7.35
一般機械	131.7	260.5	365.0	402.1	537.6	701.9	12.4%	5.33
電気機械	33.9	54.5	94.4	146.4	228.4	369.1	6.5%	10.89
肥 料	113.2	82.7	68.6	246.2	411.6	236.7	4.2%	2.09
綿・綿織物	24.5	22.5	74.3	119.0	146.9	209.9	3.7%	8.57
輸送機械	446.8	479.4	135.2	102.1	160.3	200.8	3.6%	0.45
人造繊維 (短繊維)	44.5	23.4	38.1	54.8	81.7	138.4	2.5%	3.11
メリヤス編物・ クロセ編物	9.3	7.0	32.5	71.4	100.7	133.9	2.4%	14.40
鉄鋼製品	27.4	33.8	44.4	50.6	87.0	130.7	2.3%	4.77
無機化学	43.0	56.6	73.7	84.4	95.6	125.2	2.2%	2.91
合 計	1,537.2	1,805.4	2,149.9	3,180.2	4,260.1	5,639.3	100.0%	3.67

表 11 中国の対ベトナム輸入品目の推移

(単位：100万ドル)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	シェア	2005/2000
鉱物性燃料	734.7	737.8	749.4	872.4	1,728.3	1,661.7	69.7%	2.26
ゴム・同製品	51.5	53.2	92.9	161.3	180.6	169.2	7.3%	3.29
鉱 石	11.8	17.2	17.9	39.3	109.4	121.0	4.4%	10.30
電気機械	8.6	11.3	16.6	44.1	66.3	102.6	2.7%	11.90
木材・同製品	4.5	6.0	9.8	13.7	22.5	71.6	0.9%	15.90
食用果実	12.2	48.9	69.1	69.0	32.0	57.9	1.3%	4.75
一般機械	3.8	9.3	22.5	30.9	48.5	53.0	2.0%	13.90
食用野菜	3.3	13.4	19.1	40.9	50.0	50.7	2.0%	15.36
履 物	3.1	4.6	8.0	18.5	29.8	44.7	1.2%	14.41
穀粉など	3.2	10.0	13.8	29.1	43.7	40.6	1.8%	12.68
魚・甲殻類	3.7	8.9	12.1	12.1	15.6	26.4	0.6%	7.13
合 計	929.1	1,009.9	1,114.5	1,454.8	2,478.3	2,549.3	100.0%	2.74

3. 主要製品にみる中国と ASEAN の分業

(1) 電気機械と一般機械

中国と ASEAN、特に ASEAN5 の貿易を牽引しているのは、電気機械と一般機械であり、重要性が増したものは 1990 年代後半である。中国の対

ASEAN 貿易における電気機械のシェアは、輸入は 1995 年には 7.8%、2000 年には 24.3%、輸出は 1995 年 11.3%、2000 年 23.9%であり、1990 年代後半以降に急増している。

電気機械の最大の品目は輸出入とも集積回路であり、輸出で 20.6%、輸入は 72.5%を占めている(表 12)。

表 12 中国の電気機械と一般機械の対 ASEAN 貿易 (2005 年)

(単位: 100 万ドル)

	輸 出	シェア	輸 入	シェア
電気機械	14,110	25.4%	32,657	43.5%
集積回路	2,908	5.2%	23,664	31.5%
一般機械	10,343	18.7%	12,556	16.7%
コンピューター・周辺機器	2,252	4.1%	8,200	10.9%
事務用機器	3,721	6.7%	2,419	3.2%

集積回路輸入の 73.6%はデジタル集積回路であり、輸入は 2002 年から始まり 3 年間で 174 億ドルに達した。主な輸入先はマレーシア (72 億ドル)、フィリピン (62 億ドル) とシンガポール (30 億ドル) である。電気機械の貿易は、半導体を筆頭にした部品が中心となっているが、完成品は中国の競争力が強い。たとえば、テレビは中国の輸出 2 億 3200 万ドルに対して輸入は 710 万ドル、ビデオは同じく 2 億 100 万ドルに対し 2570

万ドルとなっている。

一般機械では、自動データ処理機 (コンピューター) と事務機部品 (コンピューター・周辺機器部品) が輸出の 57.7%、輸入の 84.5%を占めている。コンピューター・周辺機器は、携帯用の自動データ処理機械 (ノートブック型 PC) は中国、入出力装置 (プリンターなど) は中国、記憶装置は ASEAN という分業体制が出来ている(表 13)。IT 関連機器は、WTO の情報技術協定 (ITA) により関税率

がゼロあるいは極めて低率であり、国境を超えた部品取引が活発に行われるネットワーク型産業として発展しており、ASEAN5 と中国の貿易拡大の原動力となっている。

表 13 中国の対 ASEAN 自動データ処理機械の貿易 (2005 年)

(単位：100 万ドル)

自動データ処理機	輸出	輸入
携帯用のもの(10キロ以下)	810	5
入力・出力装置	709	283
記憶装置	504	7,077

(2) 労働集約型製品

衣類や履物など労働集約型製品では中国が圧倒的に強い(表 14)。ただし、ASEAN5 と新規加盟国では状況が異なっている。ASEAN5 の典型はフィリピンの履物産業である。フィリピンの「靴の都」と知られるマリキナ市には2001年時点で682社の履物メーカーがあったが、中国製品の大量流入により大規模な履物メーカーは10社以下に減少してしまった。中国製品の強みはフィリピン製品の半額という安さである。フィリピンの履物輸入に占める中国と香港のシェアは74%(2004年)に達している。こうした製品では密輸品が出回って

いる。フィリピンでは、衣類、履物、野菜・果実の6-8割が密輸と言われ、中国品の浸透は実際には貿易統計を上回っている(注5)。

中国より賃金水準が低い新規加盟国の中では、ベトナムが履物、家具・寝具の輸出を伸ばし、カンボジアが衣類・付属品など繊維製品を輸出している。しかし、ミャンマーやラオスでは労働集約型製品の貿易は中国が出超となっている。進出してきた中国企業が繊維製品を輸出しているカンボジアと地場企業が成長しつつあるベトナムを除くと、輸出志向の労働集約型産業が発達していないことが理由であり、今後の産業育成が急務である。

表 14 中国の衣類、履物、玩具などの対 ASEAN 貿易

(単位：100 万ドル)

	2002	2003	2004	2005
衣類・付属品(HS61)				
輸出	514.9	796.3	968.6	1,185.6
輸入	12.5	19.4	15.6	20.3
衣類・付属品(HS62)				
輸出	390.2	601.6	697.6	720.8
輸入	4.6	6.8	9.6	16.9
履物				
輸出	233.3	297.7	399.2	329.7
輸入	20.1	32.7	52.3	80.2

(3) 2 輪車

中国からのインドネシアとベトナムへの 2 輪車(オートバイ)の輸出は 2000 年に急増した(表 15)。そのため、この両国では、それまで 8 割前後の市場シェアを誇っていた日本車のシェアが急落し、ベトナムでは中国車が 8 割近いシェアを占めるなど逆転現象が起きた。しかし、品質が悪く、アフターサービスが不十分な中国車の人気はその後急落し、低価格車を

投入した日本メーカーがシェアを回復した。ただし、品質の向上に伴い、再びシェアを拡大する可能性は否定できない。インドネシア向けは 2004 年に、ベトナム向けは 2005 年に 2 輪車の輸出が増加している。また、2003 年以降、インドネシア向けの部品の輸出が増加しており、完成品の輸出から現地組立てに移行していることが示されている。

表 15 中国のインドネシア向け 2 輪車・同部品輸出の推移

(単位：100 万ドル)

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
2 輪車	0.3	8.6	196.3	49.3	34.1	60.8	103.4	77.5
2 輪車部品	2.4	16.2	44.7	54.2	69.7	92.3	128.2	129.3

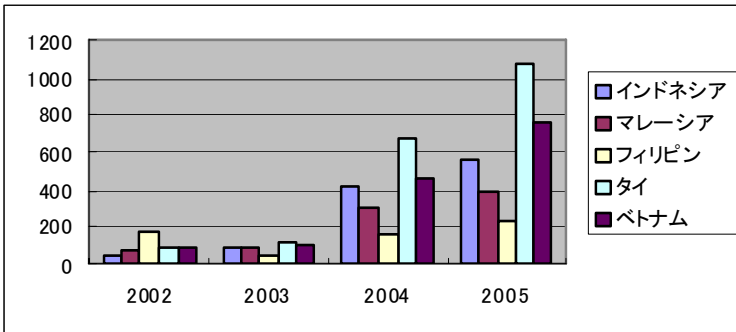
(4) 鉄鋼

ASEAN 側で懸念するのは、中国製品の集中豪雨的な進出である。2000 年前後にインドネシアとベトナムでは中国製 2 輪車の輸入が急増した。2004 年以降、中国からの輸出が急増しているのは鉄鋼である(図 1)。中国の鉄鋼は、品質は劣るものの低価格が武器になっており、マレーシアでは 2004 年にワイヤーが 12 倍、薄板 12 倍、熱延鋼板 5 倍など輸

入が急拡大した。タイでは、2004 年から建築・建材用の銑鉄半製品の輸入が急増している。こうした集中豪雨的な輸出の背景には中国での過剰設備、過剰生産の存在がある。鉄鋼の生産量は 2000 年から 4 年間で倍増し、2004 年には 2 億 7246 万トン(粗鋼ベース)となった。鉄鋼の国内消費は旺盛だが、民間企業が 2001 年以降乱立し、過剰設備、過剰生産の状況になっている(注 6)。

図1 急増する中国の鉄鋼輸出

(単位：100万ドル)



(出所) World Trade Atlas により作成

4. まとめと展望

(1) 中国の貿易における ASEAN の位置づけ

中国と ASEAN の貿易関係は、ASEAN5 と新規加盟国に分けてみるべきである。ASEAN5 とは、輸出入とも電気機械と一般機械が大きなシェアを占めており、水平分業となっている。また、収支は中国側の赤字となっている。新規加盟国とは、中国が工業品を輸出し、資源など一次産品を輸入する垂直分業であり、中国側が大幅な黒字を計上している。ただし、ASEAN5 からの輸入では資源は依然として重要である。

中国の貿易相手国としての

ASEAN は、①資源供給元、②市場(製品と部品)、③部品の相互補完先として位置づけられる。

ASEAN が中国に供給している資源は、石油・天然ガス、銅、錫、木材、ゴム、野菜、果実、魚・甲殻類、穀物などであり、資源加工品としてパーム油、木製品、調製食品も重要である。たとえば、インドネシアからは、従来の石油・天然ガス、木材などに加え、銅と錫など新たな資源輸入品が登場し 2003 年から急増している。新規加盟国は、石油・石炭(ベトナム)、木材、ゴム(4 カ国)の供給元となっており、輸入の大半をこうした資源が占めている。

ASEAN は、消費財の市場として

重要である。衣類、玩具、プラスチック製品など日用品から 2 輪車、家電製品まで多様な消費財が輸出されている。各国のマーケットを訪れると山積みになっている中国製の衣類、旅行用品、日用雑貨などが眼に入ってくる。

ASEAN における現時点での中国製品の評価は、①品質より価格を重視する低所得層あるいは中間層のニーズを満たしていること、②その結果、市場を大幅に拡大する効果をもったことである。2 輪車が代表的な例だが、低価格により従来は購入できなかった消費者が購入可能になり、市場が大きく拡大した。マレーシアでは、中国製の液晶テレビがやはり購入層を拡大している。品質は劣るが低価格という中国製品が低所得者を中心とする消費者のニーズに応えたのである。

家電で新しい動きとして、中国家電最大手の海爾(ハイアール)によりタイのユニバーサル三洋電機(SUE)の買収があげられる。冷蔵庫の生産拠点であった SUE の買収により、海爾はタイでの冷蔵庫生産技術、市場を一挙に獲得することになる(注 7)。

部品の相互補完が行われているのは ASEAN5 とである。集積回路とコンピュータ部品は輸出入とも拡大している。テレビやカセットデッキの部品の貿易も大きい。一方、自動車部品、2 輪車部品は中国からの輸出が拡大しており、電気機械とは異なっている。

(2) 特定品目への集中

中国と ASEAN の貿易の特徴は、特定品目への集中である。その典型が、フィリピンとマレーシアからの輸入に占める電気機械(特に集積回路)のシェアの高さであり、フィリピンは 71.1%、マレーシアは 63%となっている。また、ミャンマーからの輸入では、木材が 70.1%、ベトナムからの輸入では鉱物性燃料が 69.7%を占め、カンボジア、ラオスからは木材が輸入の約 4 割を占めている。

2000 年から 2005 年の間に中国の対 ASEAN 輸出は 4.3 倍、輸入は 5.0 倍の大幅な増加を記録したが、電気機械の寄与率は輸出が 33.1%、輸入が 49.3%、一般機械の寄与率は輸出が 16.8%、輸入が 19.5%と極めて高

い。輸入の増加の半分と輸出の増加の3分の1は電気機械によるものである。国別に見ると、マレーシアからの同期間の輸入の増加の72.2%、フィリピンからの輸入の増加の69.5%は電気機械の増加によるものである。電気機械の輸入の大半は集積回路であり、半導体の貿易が2000年以降の中国とASEAN5の貿易の拡大を牽引している。ASEANと中国がIT機器の世界的な生産基地になっており、多国籍企業を中心に産業内貿易が活発化していることがその背景にある。

このように、特定品目に特化する傾向は、価格変動や需要変動の影響を大きく受ける危険性ととも、資源の場合、資源の枯渇により貿易が縮小する可能性がある。新規加盟国は、極言すると、電気機械の輸出増などの中国市場の発展によるメリットをほとんど享受せず、中国からの工業品輸入を賄うために資源を切り売りしている状況であり、対中輸出品の多角化、とくに製造業品の輸出の開発を進めるべきである。

(3) 芽が出始めた新規加盟国の製造業輸出

新規加盟国からの輸入は資源が圧倒的に多いが、金額はまだ小さいながら製造業品も輸入が始まっている。最も進んでいるのはベトナムであり、電動機、印刷回路、トランスなど電気機械と履物、家具など労働集約型製品の輸入が拡大しつつある。カンボジアからは、衣類が主要輸入品となっている。ミャンマー、ラオスでも2004年頃からプラスチック、化学品、衣類、光学機器、履物などが輸入品として登場している。懸念されるのは、ASEANと中国のFTAによる影響である。FTAにより関税が撤廃される2015年までに競争力を持った輸出産業を育成する必要がある。

(4) 貿易障壁回避型進出

2 輪車や家電では、中国企業が進出し、中国から輸出された部品を現地で組み立てて販売している形態がとられている。部品といっても完成品をばらした状態に近いものである。したがって、投資といっても実態は輸出と言ってよい。完成品の輸入関

税が高い等のため、部品として輸出する貿易障壁回避型の進出である。日本企業と違って現地調達を行う能力・体制が構築されていないこともある。海外投資としては「スクリーナー・ドライバー型」といわれる初期の形態である(注8)。

こうした形態で ASEAN 市場への進出が進む可能性があるのは自動車である。自動車は、ASEAN と中国の FTA で例外(高度センシティブ品目)とされ、2015 年まで高い関税率が課されるため、輸出ではなく企業進出や企業提携により現地組立てを行うことが予想される。マレーシアでは、東風自動車や奇瑞汽車の製品のマレーシア企業による現地組立て・販売の動きが表面化している。

(5) 集中豪雨型輸出への懸念と 将来展望

今後、懸念されるのは、中国製品の集中豪雨型の ASEAN への輸出である。2000 年前後の中国製 2 輪車、家電の輸入急増の背景には中国の過剰生産があった。中国は過剰投資、過剰設備、過剰生産が行われる傾向が強く、安価な過剰品の大量輸出が

起きる可能性は否定できない。自国での価格より安い価格で輸出するのは、ダンピング輸出であり、集中豪雨的な輸出により自国産業が多大の被害を受ける場合は、貿易救済措置の発動を検討すべきである。

ASEAN と中国の FTA (ACFTA) により、18 億 5000 万人の広域市場が誕生すると喧伝されている。7000 品目の関税が段階的に撤廃されることにより貿易は拡大することは確かである。しかし、自動車、2 輪車、家電製品、鉄鋼、米など多くの重要な品目が例外となっており、2017 年末まで 20% の関税が維持できるし、一部品目は 2014 年末まで 50% 以上の関税が維持できる。そのため、こうした品目では FTA の効果が実現するには時間がかかると考えられる。ただし、中国国内の供給過剰から ASEAN への輸出が急増する可能性はあるし、関税率の低い部品での輸出や中国企業による現地生産などにより、例外品目となっても中国製品が ASEAN 市場に流入する可能性は小さくない。

長期的にみれば例外品目も段階的に関税が撤廃されていくのは確実で

ある。したがって、例外が認められる経過期間にどのような産業をどう競争力のある産業に育成するののかという産業政策が重要になってくる。電子産業のように最初から輸出指向型産業として発展してきた産業は中国との間に分業が成り立ちつつあるが、輸入代替型産業をどのように経過期間中に競争力のある産業として分業体制に組み込むのが課題となる。新規加盟国は、コスト面で優位性を持つ労働集約型産業と電気電子などの新たな産業の育成が課題である。金額は小さいものの輸出産業の萌芽はすでにあり、産業政策が重要である。

輸出産業の育成は、輸出振興策だけでなく、外国投資の誘致に重点を置きつつ、インフラの整備、通関などビジネスの円滑化、ビジネス人材の養成、裾野産業の育成など総合的な政策が必要である。新規加盟国は、改革・開放後の中国が労働コストが高騰し始めた香港から労働集約型の製造業企業の進出の受け皿となったように、タイやマレーシアさらには中国の労働集約型製造業の進出先となるように誘致策と環境整備を進め

るべきであろう。

一方、長期的に見ると、中国の人口が減少に転じるのは 2020 年ころと見られており、低賃金は維持できなくなる。また、人民元は長期的にみれば現在の水準から切上げられるのは確実であろう。ASEAN と中国の経済関係は、2010 年代に競争力の点では大きく変化する可能性が高い。ASEAN に生産拠点を維持する意味はこの点にも見出せる。

注

1. 1990 年には、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアは ASEAN 未加盟だったが、2005 年との比較のため 1990 年の ASEAN のシェアにはこれらの国の貿易額を加えている。
2. 輸出が FOB、輸入は FOB より 10% 程度多くなる CIF で統計が作られていることもある。しかし、輸出は仕向け地、輸入は原産国を相手国として統計が作られているため、香港を経由して中国に再輸出される輸出が香港への輸出に計上され、香港を経由した中国からの輸入は原産地である中国からの輸入となることが基本的な原因と考えられる。この問題については、石田正美「国際

- 貿易における中国・ASEAN の競合と協調」が詳しく分析している。(大西康雄『中国・ASEAN 経済関係の新展開』アジア経済研究所、2006 年 1 月)52-54 頁を参照。
3. 中国の ASEAN に対する 2 国間援助は、インドネシア、フィリピンと新規加盟国に集中している。詳細については、石川幸一「着実に進展する中国と ASEAN の経済協力」(国際貿易投資研究所『季刊国際貿易と投資』2006 年夏号)を参照。
 4. 新規加盟 4 カ国への外国投資状況と投資環境の評価については、「アセアン新規加盟国等における海外事業活動の課題に関する調査研究」国際貿易投資研究所、2005 年 3 月、が詳しく、ベトナムが離陸しつつあると高い評価を与えている。
 5. 尾島絵美、米山洋「フィリピン」(日本貿易振興機構アジア大洋州課『南進する中国と ASEAN の対応』、2006 年)
 6. 鉄鋼については、梶島康介「インフラ整備などを支えに拡大持続—鉄鋼産業」(日本経済研究センター『中国ビジネス これからの 10 年』日本経済新聞社、2005 年) 215-247 頁。
 7. 「三洋、冷蔵庫の生産委託」、日本経済新聞、2006 年 10 月 26 日付け
 8. 現地生産といっても完成品をばらして持ち込み(輸出)、組立てを行う生産形態である。「ドライバーを回し部品をくっつけるだけ」の生産という意味でスクリュー・ドライバーと型名付けられた。製造業の極めて初期の進出形態である。

[参考] 中国と ASEAN に関する本誌掲載の関係論文として、次のものがあります。

- ・「着実に進展する中国と ASEAN の経済協力」 65 号 2006 年 8 月
- ・「東アジアの地域統合をリードする ASEAN」 64 号 2006 年 5 月
- ・「ASEAN と中国の FTA をどう評価すべきか」 63 号 2006 年 2 月
- ・「ASEAN—中国 FTA の ASEAN～主要産業への影響」 62 号 2005 年 11 月
- ・「始動する ASEAN—中国 FTA (ACFTA)」 61 号 2005 年 8 月
- ・「地域統合の第 3 の波—東アジアの地域統合」 60 号 2005 年 5 月
- ・「活発化する中国企業の ASEAN 投資」 59 号 2005 年 2 月

(注) 石川幸一が執筆した論文のうち、2005 年以降のものに限る。